

農産FAX情報 第2号

令和6年6月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

(1) 赤かび病の防除

- 止葉期は平年より8日早く、出穂期が早まることが予想されます。開花の始まりを確認したら1回目の防除を行いましょう。
- 降雨が予測される場合、防除を前倒しするなど天候に合わせ防除を行いましょう。
- 穂全体に薬剤がかかっていない場合や、発病を確認してから散布では効果が低いです。遅れて出穂・開花する個体もあるため、複数回防除を行いましょう（表1）。

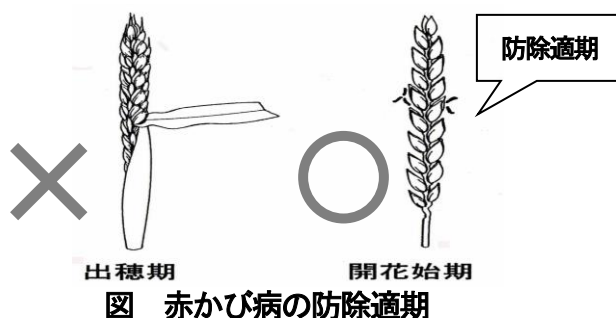


表1 赤かび病防除を中心とした防除体系例

防除時期	薬剤名	分類系統	使用濃度(倍)	使用回数	使用時期
1回目防除 (開花始期)	プロラインフロアブル	DMI	2,000	2回以内	収穫21日前まで
2回目防除 (7日後)	ミラビスフロアブル	SDHI	1,500	2回以内	収穫7日前まで
3回目防除 (7日後)	バラライカ水和剤	フタルイミド DMI	500	3回以内 (出穂期以降は1回)	収穫14日前まで

注：耐性菌の出現を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、系統が異なる薬剤を組み合わせましょう。

(2) アブラムシの防除

- 出穂前の5月下旬にモモアカアブラムシ、ワタアブラムシの発生が確認されています。出穂とともに穂へ移り繁殖、吸汁します。45%以上の穂でアブラムシが観察される場合は減収するので、薬剤防除が必要です（表2）。

2 てんさい

(1) 中耕

○中耕作業により、除草効果や地温上昇効果が期待できます。実施時期が遅れると、根や茎葉を傷めるため注意しましょう。

(2) テンサイトビハムシの防除

○高温少雨により発生が多くなります。ほ場観察を行い、発見しだい薬剤散布を行いましょう（表2）。

3 ばれいしょ

(1) ナストビハムシの防除

○成虫は、萌芽期頃に成長点付近を食害し生育を妨げるため、成虫を発見しだい薬剤散布を7～10日間隔で2回実施しましょう（表2）。1～2mmの円形の食害が特徴です。

○6月上旬ごろから産卵が始まり、ふ化した幼虫は地中に入りストロンや根、イモを食害するため、成虫を防除し、幼虫の密度を抑えましょう。

表2 殺虫剤使用例

適用害虫〔作物〕	薬剤名	処理濃度	使用回数
〔秋まき小麦〕 アブラムシ	スミチオン乳剤	1000 倍	1 回
	ウララ DF	4000 倍	2 回
〔てんさい〕 テンサイトビハムシ	アクタラ顆粒水溶剤	3000 倍	3 回
	ダントツ水溶剤	4000 倍	3 回
〔ばれいしょ〕 ナストビハムシ	アクタラ顆粒水溶剤	2000 倍	3 回
	ゲットアウト WDG	3000 倍	4 回

4 豆類

○除草剤は、雑草の種類や発生状態によって適切に選択しましょう。また、土質や土壌水分を考慮して使用し、薬害の発生を防止しましょう。

○散布作業の際は、近接する農作物に飛散しないよう風向等に注意しましょう。

防除から帰ったら生産履歴への記帳を！

農業機械の操作はあせらず、安全確認を！

徐々に暑くなる季節、日陰でこまめな休憩を！